

シベリア自然探訪紀行

第3部：極寒期の狩猟と生物相

私たちが九日間滞在したピーターのキャンプには、五頭の狩猟犬が住んでいた。これがシベリアンハスキー犬と言うが、日本で見るとハスキー犬とは、およそ風貌が違っていた。毛色も毛足の長さもまちまちで、目もあの三白眼ではない。もっぱら猟犬としての選抜を受けてきたもので、容姿は問題にされていないのだ。

シベリアに犬の原点を見た

リーダー犬のヴァルシエクの名

は、ロシア語でオオヤマネコを意味する。もう一頭の雄はクーチユームで、四百年前のヤクト人の酋長の名だ。雌はプアルマ（パームヤシ）、子犬の雄はヴォーカ（火山）、雌はヴェールカ（リス）である。ロシア語では、女性名詞は最後がア段で終わるため、名前から雌雄が分かる。

短期間の滞在であったが、私たちは彼らの狩猟犬としての能力を思い知らされた。キャンプの十kmほど下流のでき事であった。上流の方から犬の吠え声が聞こえ、はるか遠くの川の中に黒い点が一つ。ヴァルシエクとクーチユーム

に両岸から挟み撃ちにされて、ムース（ヘラジカ）が川を泳ぎ下ってきたのである。頭胴は1m50cmほど、去年生まれの子鹿だ。鼻面が長く、まるで馬のようだ。かわいそうに、へとへとに疲れている。ポートで接近する私たちを見る目は、絶望の色を湛えていた。

せっかく犬たちが主人の所まで送り届けた獲物であったが、幸いプロのハンターは、不必要な殺生はしない。犬たちから離れた中州に追って逃がしてやった。

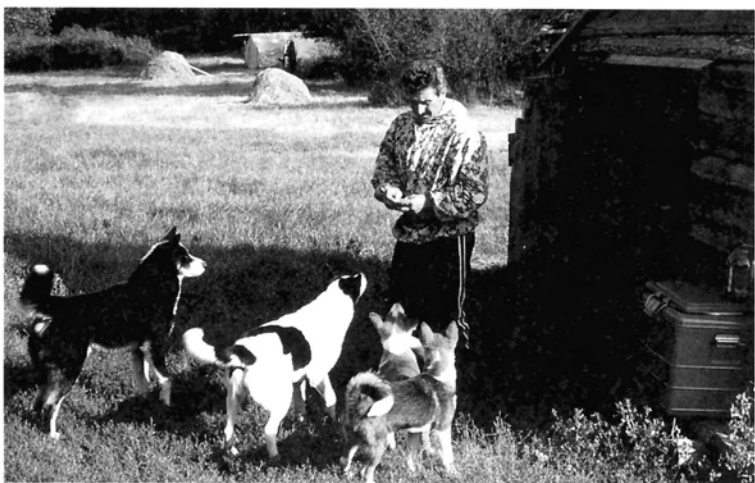
犬たちは人の言葉や指示をよく解する。ある時、放牧の馬の群れがキャンプにやってきた。雑穀を与え終えると、ピーターは口笛を吹き鳴らした。すると、それまでほとんど無関心でいた五頭の犬たちが突然吠えながら一斉に馬に突進し、あつという間にキャンプから追い出したのである。

猟犬としての訓練はどうしているかとピーターに聞いたら、特別何もしないという。飼い主が個々に訓練しなくとも、子犬たちは犬集団の中で、今何をなすべきか学ぶのである。

犬は放し飼いだ。犬小屋もなけ



筆者
井上 信夫



▲ピーターと、キャンプの犬たち

昭和24年山形県飯豊町に生まれる。新潟大学理学部卒業、県内の教壇に立つが、かたわら魚類調査や子供たちの野外体験の指導にあたる。二年前に転職して、これらを本業とする。昨年から世界少年冒険村のスタッフに加わる。

〈連絡先〉自然案内舎 ネイチャーワーク
新潟県中魚沼郡津南町芦ヶ崎甲1372-1
TEL(0257)65-3622



▲ヴァルシユクとムースの頭



▲犬に追われたムースの仔



▲小屋の入口にかかるムースの頭骨(若い雄)



▲支川の風景…樹木の根は浅い



◀ムースが集まる塩なめ場
…一面跡の跡だ

れば、首輪もない。自由に森や川で過ごし、キャンプで昼寝を楽しむ。気が向けば人の後をついて回る。夏は草の上で眠り、マイナス五十℃の極寒の冬は雪の中で眠る。子犬の父親は、昨冬死んでしまったという。クロテン狐の最中に冬眠中のヒグマを追い出してしまい、開いた末に殺されたのだ。

ムース猟

キャンプに着いた翌日、私たちはムースが塩をなめに集まる湿原に案内された。ポートが着いた川岸から、針葉樹の林を抜け、湿原の草むらを越え、三十分ほど歩いて目的地に到着した。

目の前の浅い池は、長さ三百m、幅は五十mほどもあるか。キンクロハジロやカワアイサなどのカモの家族群が、警戒して泳ぎ去る。岸辺にはヨシとガマが茂り、リンドウの青紫やウメバチソウの白い花も見える。池の中にはエビモの仲間も茂っている。

対岸の湿原が、ムースの塩なめ場だという。息を凝らしてしばらく待つが、私たちの目の前には現

れてくれなかった。ゴムボートで渡ってみると、ぬかるむ泥炭の上に一面に蹄の跡、八十頭ほどが入れ替わりやってくるという。泥炭を手に取ってなめると、確かにわずかに塩気を含んでいた。

雨雲が近づいてきた。雷が鳴り響く中、私たちは二人のスタッフを残して、ポートに戻る。彼らは一晩中ここに残り、ムースを待つのだという。

翌朝、彼らは手ぶらで戻ってきた。三頭やって来たが、暗いため撃たなかったという。その翌朝、キャンプに、大きな肉塊が届いた。五百kgの雌で、現場で解体して切り分けてきたのだ。それからの数日間、私たちは様々なムース料理を存分にご馳走になった。

クロテン狐

シベリアのハンターの主たる収入源は、サーバルの毛皮である。サーバル、すなわちクロテンは北海道にも分布するが、シベリア産は良質で極めて高価である。猟期は十月二十日から二月二十日までの四ヶ月間と決められており、狐

場の面積によってライセンス料を国家に支払わなくてはならない。サーバルの罠は、カップカンと呼ばれる小形のトラバサミである。木箱や石積みの中の覆いの中に魚を入れ、入口にカップカンを潜ませる。これを二百〜四百個ほどしかけ、スノーモービルで見回す。罠にかかったサーバルは極寒の中で、カチカチに凍っているという。

完全結氷する川

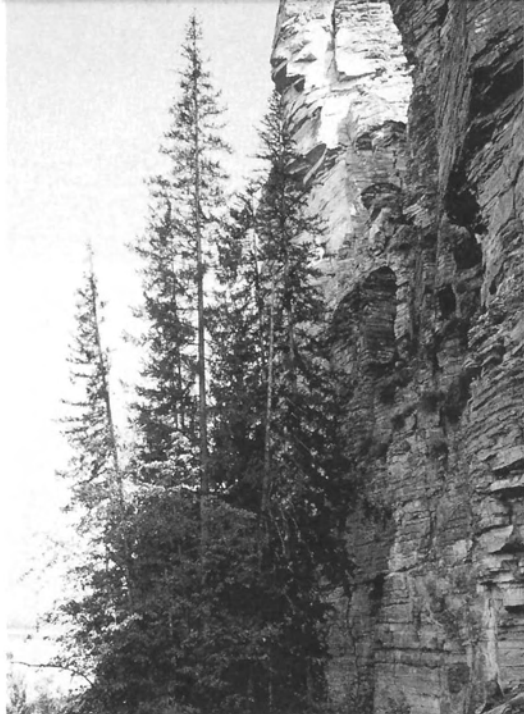
ネルカン北方のこの地の冬の寒さは、同じシベリアでもハバロフスクなどとは比べものにならない。マイナス五十〜六十℃にもなり、川も大地も全面凍結するのである。

シベリアの冬の訪れは早く、九月初旬には初雪が降り、十月中旬には根雪となる。完全に雪が解け



▲上…氷で押し上げられた立木の山

▲下…ツィーバンダー洞窟 氷筒が見える(河口氏撮影)



▲川岸の崖下にそそり立つトウヒの仲間



▲ダウリアカラマツの林を行く…山火事の跡が残っていた

るのは五月中旬だ。完全結氷した川は、道路代わりになる。厚さ一m五十 cmほどの氷の上を、スノーモービルで行き来するのである。春先氷が砕けて流れる様は勇壮である。上流から砕けた氷が流されてきて、水位は5 mも上昇する。あちこちに木が流れ、氷が砕ける音が四々五日間鳴り続くといい。注意して見ると、川岸のあちこちにうず高く積み上げられた流木は、みな流れに直角になっている。

凍れる大地

氷で岸に押し上げられたのだ。凍結した大地は、夏になっても完全に解けることはない。川岸近くの草原では地下5 mぐらいから、森の中では三十 cmも掘れば凍結した大地、すなわち永久凍土である。川の岸の、氷で削り取られて崩れかかった土手を見ると、樹木の根はごく浅い事に気がつく。せいぜい六十 cmぐらいだ。永久凍土層までは根が侵入できないのである。

キャンプの上流のツィーバンダーでは、氷の洞窟を見た。長さ三 km、中に地底湖が二つあるという。内部にはザラメ状の雪が積もり、床には天井から滴った水滴が水った二十〜四十 cmの氷筒が生えてい

シベリアの木と花

森林を構成する高木は、全て針葉樹である。キャンプ周辺には、日本のカラマツに似たダウリアカラマツが多く、トウヒ属も見える。アカマツそっくりの樹皮のマツが見える。中国から新大林学科に來ている研究者によると、モンゴリアンスコッチパインだとの事だ。一方、広葉樹はキャンプ周辺に目立つベリヨイザ(シラカバ)と河畔林を構成するドロヤナギ、それにツツジ科を初めとする各種の低木である。中でも目立つ花をつ

る。懐中電灯に照らされた氷は、ガラス細工のように輝いていた。洞窟の入口には古ぼけた木の柵が残っていた。かつて天然の冷凍庫として使われた名残だ。六十年ほど前まで、対岸に先住民のエヴェンキ族の大集落があった。今では二家族しか残っていないという。



▲ツツジ科の低木、コケモモ
…日本の高山にもある



▲食卓をにぎわしたフサスグリ



▲ホザキナナカマドにはたくさん
の虫が集まる



▲ホザキシモツゲの花



▲チョウノスケソウの群落
…日本では珍しい高山植物だ



▲山火事跡、川岸に多いヤナギ
ラン



▲ヤチ坊主の中のワリユージュヤ…子犬はヴォーカン

けるのは、ピンクの細かい花を穂状につけるホザキシモツゲである。ホザキナナカマドは白い小花を穂状につけ、ハナカミキリやハナバチの仲間がたくさん集まる。両方ともわが国の中部以北にも分布する植物である。

私たちが訪れた八月は、実りの秋である。キャンブの回りや河畔、林の縁で赤い実をびっしりとつけるのはフサスグリだ。日本でも栽培されているが、ここでは野生のものバケツ一杯ぐらい簡単にとれる。甘酸っぱい実はジュースやジャムになり、食卓を美しく彩る。乾いた林の林床には、赤いコケモモが実り、ブルーベリーの仲間が黒紫の実をつける。

草花の花の盛りは、雪解け直後の六月である。あたり一面がお花畑になるといふ。それでも、川岸にはノコンギクの赤紫や、ヒメキンギョソウの薄黄色、カセンソウやノコギリソウ・キンロバイの黄色が美しい。林の緑や川岸のあちらこちらに

見られるヤナギランは、1mほどの丈に赤紫の花をつける。北極を取りまいて北半球に広く分布する草木で、新潟県にも分布する。アラスカやシベリアでは、山火事跡に真っ先に侵入して群落を作る。川岸の崖の岩盤上にへばりつくように群落を作るのは、我が国では高山植物として知られるチョウノスケソウだ。一見草のように見えるが、木本植物だ。

このほかにも、有毒のトリカブトやホタルブクロ・ワレモコウ・イチヤクソウなど、たくさん草花を見た。日本には分布しない種類もあるが、近縁種が分布しているものが多い。

湿原の池の近くは、イネやスケの仲間の草原である。平坦な所もあるが、コウチカが並ぶ所は、足を取られてまことに歩きにくい。釧路湿原ではヤチ坊主と呼ぶものだが、ここでは腰までの高さになる。不用意に池に近づくと、いきなり草に隠されたヤチマナコに落ちてしまう危険もある。

動物たちの出会い

動物もおもしろい。ムースやヒグマ・キツネの足跡は、そこかしこで見られる。同行の渡辺さんは、目の前に浮上したカワウソを見た。川辺ではアジサシ類やカモ類が見られ、上空をコウノトリやクマガラが横切る。シラカバの梢をマヒワの群れが通り過ぎ、遠くからホシガラスやミヤマカケスの声が聞こえる。

中でも印象深いのは、現地でガイーラと呼ぶオオハムである。アビの仲間の水鳥で、冬鳥として日本近海にも渡来する。ロシア名は、その特徴的な鳴き声からきている。昆虫類も何十種類か採集した。川岸には、我が国の高山に住むカオジロトンボの仲間も見られた。

一行の興味を引いたのは、現地でサランチャイと呼ぶバツタである。川原の砂利の上に住み、人が近づくと赤い翅を広げて羽音をたてながら飛んでいく。私たちはガラガラバツタと呼んだが、帰国後青陵短大の長島氏に届いたらアカハネバツタではないかという。我が国北部の海岸部に分布し、新潟県内でも記録があるという。シベリアには、日本の動植物と共通な種類や、ごく近縁な種類が生息している。水河時代最盛期の日本列島では、これらの北方系の種族が栄え、その一部が高山やシベリアは、日本の生物相のルーツを探る上で極めて興味深い所だ